

## 古代建築の上部構造

岡田英男

近年建築遺跡の発掘調査が全国各地で進められ、建築史上にも重要な遺跡が次々と発見され、図面・模型あるいは実物による再現が試みられている。発掘調査で解明されるのは、建物の配置・平面・柱径あるいは基礎・礎石・同掘付痕・側溝などの遺構や、地鎮具・瓦・土器・木簡などの遺物で、建築部材の一部が発見されることがある。しかし、その遺跡に建っていた建物がどのような構造・意匠を持っていたかは直接明らかには出来ない。

弥生・古墳時代の堅穴住居・高床倉庫などではその構造が推定され、実際に各地で復原されている。近年では宮殿・官衙の建物などの復原も進められ、平城宮の朱雀門・大極殿についても復原計画が進んでいる。

遺構復原については発見部材があればこれが基準となるが、現存する古代の建築遺構に見られる古い技法を中心として、伝統的形式を伝えると考えられる古式の神社建築、家型埴輪や家屋文鏡などの建築を表現した遺物、または記録により推定される建築手法等が参考とされ

ていることは言うまでもない。多くは詳細な考察のうえに復原されているけれども、現存建物あるいはその前身建物や転用古材によって判明する建築構造のうち、奈良時代を中心として桁から上方の棟木に及ぶ屋根裏部分の小屋組構造について検討を加え、建物推定復原の根拠を固めようとするものである。この時代の構造としては二重虹梁蓐股、二重虹梁斗、又首・合掌組等各種の手法がある。まず遺構に見られる各手法について順次述べる。

### 二重虹梁蓐股

法隆寺経蔵 桁行三間、梁間二間、切妻造、楼造の奈良時代唯一の遺構で、上層柱は別に立てる。妻飾・内部とも二重虹梁蓐股で上層梁間二間に大虹梁を架け、妻虹梁は中央を柱・大斗で受けるが中間は持放しとし、大虹梁に蓐股を置いて二重虹梁を架け、両端に三斗を組んで母屋桁を受け、二重虹梁中央に蓐股を置き、平三斗で棟木を受けるものである。蓐股の形は簡略古風で、唐招提寺講堂、坂田寺廻廊発見の

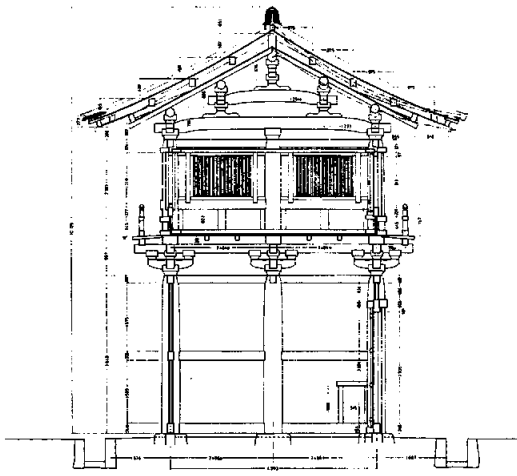


図2 法隆寺經藏梁行断面図  
【奈良県文化財全集】

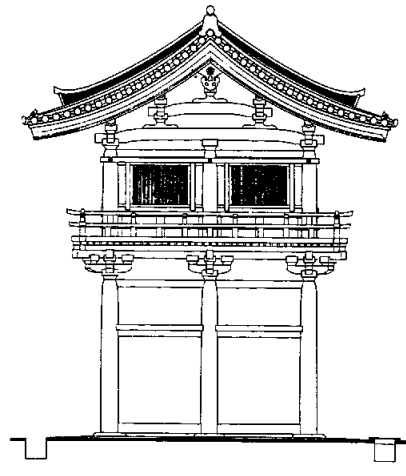


図1 法隆寺經藏側面図  
【奈良県文化財全集】

ものと類似する。天平十九年（七四七）の「法隆寺縁起并流記資財帳」に見える楼式口の「一口経楼 長三丈一尺 広一丈八尺」に当る奈良時代初期の建物である。<sup>(1)</sup>

法隆寺東院伝法堂 東院創立に当たり橘夫人宅から施入された。もと平城京内にあったと考えられる桁行五間、梁間四間、一方の妻側に棧敷付の住宅系建物を移築して桁行七間とした。切妻造で妻飾・内部とも二重虹梁髹股。両妻は中央に柱がたち、大斗で大虹梁を受けることは前項と同様である。側桁・入側桁の間にも繫虹梁上に髹股を置いて母屋桁を通す。奈良時代の二重虹梁髹股の代表的な遺構である。<sup>(2)</sup>

法隆寺東院伝法堂前身建物 「資財帳」によると橘夫人宅を施入されたと伝えているが、昭和一三〜一七年度の解体修理の際の綿密な調査によって移建が確認され、移建前は桁行五間、梁間四間で、内部は桁行三間と二間の二室に分かれ、構架は伝法堂同様の二重虹梁髹股、繫虹梁上にも髹股を置いて中桁を受け、床張り、軒は一軒、屋根は恐らく栓皮茸、一方の妻に棧敷が設けられ、住宅風建物であったと推定されている。この建物を奉納した橘夫人は橘大夫夫人三千代の姪に当り、聖武天皇夫人であった橘古那加智と推定されている。東院造営当時、天平一二年（七四〇）から同一七年の間、都は平城を離れ恭仁宮に遷り、さらに紫香樂、難波をへて平城に遷都している。この間に主人の不在となった平城所在の建物が施入されたのではなからうか。なお、一方

に棧敷が付くこの前身建物は園池に臨むように建てられた遊藝的施設の建物ではなかったと思われる。<sup>(3)</sup>

海龍王寺西金堂 内部に五重小塔を安置する。桁行三間、梁間二間、切妻造、鎌倉時代正安元年（一二八八）に改築されて軸部には古い材は残っていないが、現状も妻飾・内部とも二重虹梁幕股で、当初も同様であった。<sup>(4)</sup>

法隆寺東院舍利殿および絵殿前身建物 現在の建物は建保七年（一一一九）建立、桁行七間、梁間二間、前身建物の古材がかなり転用されている。現堂の妻飾は虹梁、通肘木二段に二重虹梁を積上げ、その上を又首組とし、内部は大梁・天井桁に束を立て、二重梁を架け、束で母屋・棟木を支えている。当初と推定された大虹梁四丁が大梁に転用され、大虹梁上端に幕股の太柵穴と合掌仕口があり、当初は二重虹梁幕股で、後に妻飾を又首組、内部を合掌に改めている。又首束の仕口を持つ大虹梁が断片を加えると四丁あり、妻飾や馬道脇のほかにも又首束を立てたところがあったかもしれない。当初掘立柱で貞観元年（八五九）の道詮の改修で礎石建となったと考えられている。当初は掘立柱でありながら二重虹梁幕股であったことになるが、この建物には聖徳太子の御持物等が納められていたから、建物も夢殿について重要視されて丁重な構架が採用されたのであろう。<sup>(5)</sup>

唐招提寺創建講堂 現堂は桁行九間、梁間四間、入母屋造で、大虹梁に幕股をのせ、天井桁を回して身舎に折上組入天井を張る。もと平城

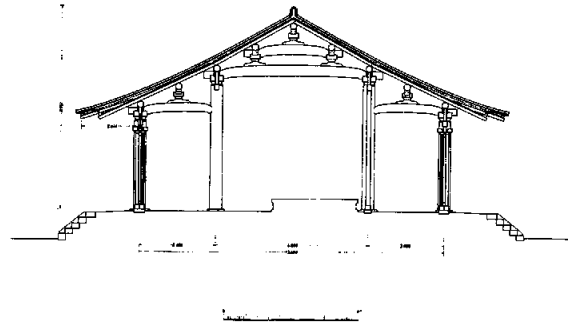


図3 唐招提寺創建講堂梁行断面図  
【修理工事報告書】

宮（第二次）東朝集殿で当時は切妻造、内外とも二重虹梁幕股であった。唐招提寺移建時に入母屋造に改造されたが、内部は化粧屋根裏で、二重虹梁幕股はそのまま踏襲され、妻の大虹梁を又首台に転用し、繫虹梁上の母屋桁を残し、両側面にも繫虹梁を入れて母屋桁を廻し、ややおくれて身舎に組入天井が張られた。鎌倉時代建治元年（一二七三）の解体修理の際に、二重虹梁・同上の幕股、側・入側中間の母屋桁は撤去され、その後さらに江戸時代延宝年間（一六七三〜八一）にも解体修理を受けた。さらに明治三八年から四一年度にわたる解体修理の際に、小屋組を西洋風の真束小屋組に改められたため、小屋組は鎌倉時代の状態も不明で、昭和四二〜四六年度の再度の解体修理の際も、小屋組はそのまま踏襲されている。<sup>(6)</sup>

法隆寺東大門 切妻造の八脚門、奈良時代初期の建立と考えられるが、「資財帳」にはこれと完全に規模が一致する門の記載がない。解体修理の際に平安時代に移築したと認められる古い番付が発見され、現在

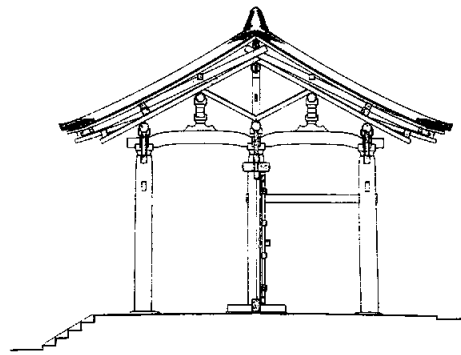


図4 法隆寺東大門梁行断面図  
【修理工事報告書】

る。幕股は金堂高欄の人字形割束の束間をふさいだ形で、板幕股の中で最も古風なものである。

**東大寺転害門** 東大寺西面大垣北方に旧一条大路に向かって開き、天平宝字頃の建立と考えられている。大規模の切妻造、八脚門、現在出組で側通りに通肘木一段を加えているが、本来平三斗で大虹梁を大斗で受けていた。妻飾は二重虹梁幕股、内部は大虹梁幕股で三棟造とするが、小屋組は梁間が大きいから二重梁・棟束であったと考えられる。幕股の形は独特で大規模の門にふさわしい豪快な形を持つが、両脚が大きく盛り上がり反転し、中央に宝珠状の彫込みがあり、法隆寺東

地は本来の場所ではなく、

また旧位置も明確でない。

妻飾は二重虹梁幕股、内部にも親柱が立ち、大虹梁・幕股で各中間の母屋桁を受け、親柱通りの敷桁との間に逆方向に垂木を渡して三棟造とする。

その上部の構造は明らかでないが、親柱通りの桁に棟束を立てて棟木を受けるように復原されている。

大門の幕股から変化した形と思われる。

現存する奈良時代の八脚門が二棟とも三棟造であるため、当時の八脚門は、一般に三棟造としたと考えられている。二重虹梁幕股は切妻造の建物では最も丁重な構架であり、宮殿・官衙や寺院の主要の門はともかくとして、邸宅その他では三棟造でなかった門も少なくなかったであろう。現存する室町時代の春日大社廻廊が三棟造であり、古代の複廊は三棟造としていたと考えられるから、これに続く門は三棟造とされたであろうが、後述するように貞観改築の法隆寺東院中門（礼堂前身建物）は簡単な叉首・合掌組で妻柱以外は棟通りに柱がなく、三棟造ではなかった。唐招提寺講堂地下調査で発見された小路に面する五間門も梁間二間で、これも親柱通り中間に柱がなく、三棟造とはならないはずである。なお、二重虹梁幕股は切妻造以外にも寄棟造・入母屋造にも用いられることがあった。

**当麻寺前身曼荼羅堂** 現在の曼荼羅堂は解体修理の時に永暦二年（一一六一）の棟木銘が発見されて平安時代にさかのぼることが判明したが、内陣構架を身舎とする前身堂がある。前身堂は平安時代の初頭に宮殿関係と思われる古材を多量に転用して建立されたが、身舎は桁行五間、四面庇、寄棟造で、ややおくれて正面に孫庇が設けられた。身舎の構架は大斗肘木・二重虹梁幕股で、棟木・入側桁の中間に母屋桁を通し、側面入側柱から半截の大虹梁を梁行大虹梁の側面に納差しとし、幕股をのせて母屋桁を受け、母屋桁の四隅の組手は下に支えがな

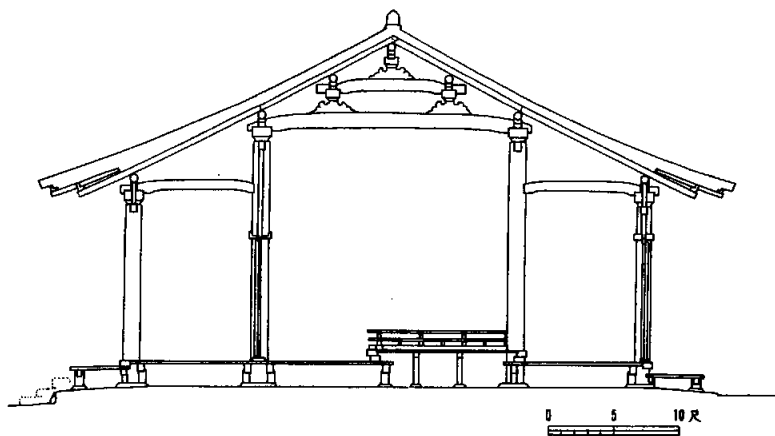


図5 当麻寺前身曼荼羅堂復原梁行断面図

殿、室町時代には法隆寺東院南門などと長く用いられた。坂田寺廻廊 虹梁と蓐股で構成される構架を持ったものに坂田寺廻廊がある。坂田寺の創立は飛鳥時代と考えられるが、発掘調査によって判明している伽藍は奈良時代中頃の造営になるものである。廻

く、校蔵の出桁のよう  
に持放しとなる。寄棟  
造で二重虹梁蓐股構架  
とするのはこの前身堂  
だけである。蓐股は唐  
招提寺金堂に近い複雑  
な形になっているが、  
曲線はややくずれてい  
る。<sup>(9)</sup>

二重虹梁蓐股は平安  
時代に平等院鳳凰堂翼  
廊・同尾廊、法隆寺鐘  
楼、広隆寺講堂、鎌倉  
時代では蓮花王院本  
堂、教王護国寺蓮花  
門・同慶花門・同東大  
門の妻飾、桜井神社拝

廊は金堂両脇から出てその前庭を囲み、梁間三・〇三mの単廊で、一部出土した建築部材の中に法隆寺経蔵・唐招提寺講堂と類似した肩の張らない板蓐股が発見されており、大虹梁中央に蓐股を置き、三斗をのせて棟木を受ける構造であったと推定される。<sup>(10)</sup>

一重虹梁斗式

二重虹梁蓐股の簡略化された形式で、建物の梁間が狭く、蓐股を入れる高さの余裕がなく、斗だけにしたもので、斗で二重虹梁・棟木を受けるものである。

法隆寺食堂 「資財帳」に見える

式口政屋のうち「一口長七丈広三丈三尺」に当たる建物と考えられ、奈良時代の建立である。妻飾は大虹梁と二重虹梁上に斗を置いて蓐股が入らない。食堂は桁行七間、各間一〇尺に対し、梁間は各間八尺と狭いので蓐股を入れる余地はなく、斗だけで収まっている。内部は大虹梁上に合掌を組み、その

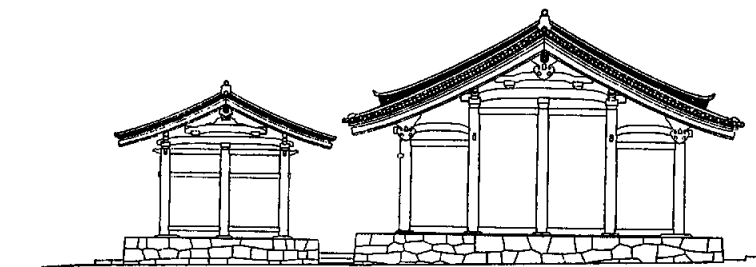


図6 法隆寺食堂及び細殿側面図  
清野清「法隆寺建築の研究」

拌みに斗・肘木をのせて棟木を受けている。<sup>(11)</sup>

法隆寺細殿 「資財帳」の政屋式口のうち、「一口長六丈八尺広一丈八尺」の後身で、かつて食堂と二棟を一体に用いていたらしいが、現在はやや離れて別個に建っている。現在の建物は桁行七間、梁間二間、切妻造、正背面開放して鎌倉時代の建立と考えられている。解体修理の調査によると、柱・頭貫・妻虹梁・肘木・垂木の一部に古い松材が残っていた。現在の妻飾は大虹梁・斗・二重虹梁、裏股、内部は陸梁に裏股がのるが、妻二重虹梁上端両脇の裏股ののる位置に、斗の太枘穴とその圧痕があり、二重虹梁木口上端に垂木当りと勾配欠き、大虹梁鼻にも垂木勾配の欠があり、妻飾はもと食堂と同様に二重虹梁斗式で、垂木位置が現状よりも低かった。

内部の大梁には古い材はなかったが、旧棟木下端に山型の合掌押みを受ける山型の仕口があり、梁上に合掌を組み、合掌の押みで直接棟木を受けていた。この棟木の合掌押み仕口のような手法は古代の伝統的技法を伝えたもので、細殿の前身建物の年代は平安時代にさかのぼる可能性が大きいと考えられよう。<sup>(12)</sup>

### 二重梁・束立て

法隆寺金堂・唐招提寺金堂の天井上の構造には二重梁・束立て構造が用いられている。

法隆寺金堂 わが国最古の仏堂で七世紀建立と考えられ、初重桁行五

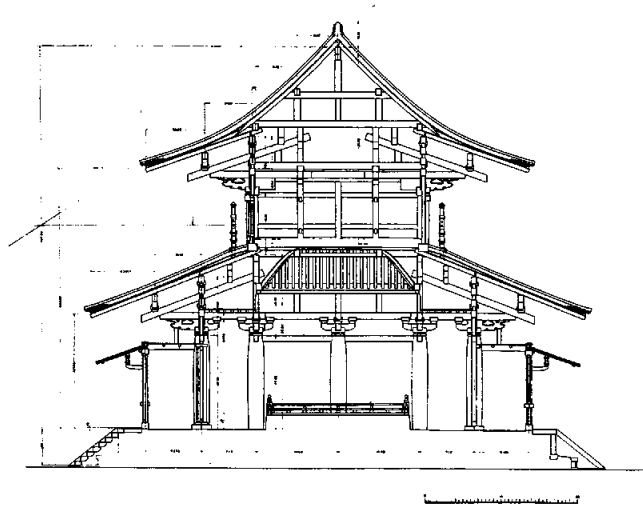


図7 法隆寺金堂梁断面図  
【修理工事報告書】

間、梁間四間、二重で初重に裳階が付く。内部は二重の地垂木尻上端の土居に大梁の土居に大梁二丁を架け、束を立てて二重梁を渡し、両端に母屋(先端蝶羽桁)を組み、棟木は二重梁上に立つ棟束と野肘木で受ける。妻飾は妻の地垂木尻上の土居を又首台として又首組とし、拌みに斗をのせ、さらに肘木と巻斗で棟木を受け、又首棹中間に斗・肘木を置いて母屋桁を受けている。<sup>(13)</sup>

法隆寺中門 七世紀末乃至八世紀初頭の建立で、和銅四年(七一二)に塑像金剛力士像が完成している。二重門で明治三五・三六年度の解体修理に小屋組は大改修を受けているが、金堂と同様に二重の地垂木尻に土居を置いて大梁を架け、束を立てて二重梁とし、斗・野肘木で棟

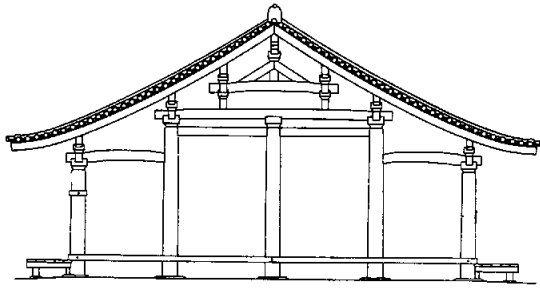


図8 元興寺東室南階大坊復原側面図  
【奈文研學報】第4冊

解体修理の際に、浅野清・鈴木嘉吉氏によって詳しく調査されており、元興寺の東室南階大坊が復原されている。小屋組関係の古材では、大梁七丁、妻虹梁一丁と同断片一丁、内部二重梁三丁、妻二重虹梁一丁があり、妻は大斗上に通肘木を入れ、通肘木上に束を立て、三斗と二重虹梁を組み、その三斗で母屋を受け、二重虹梁上は又首組とし、大斗肘木で棟木を受ける。内部は大梁に束を立て野肘木で母

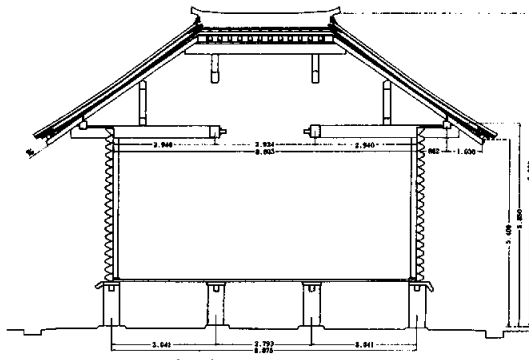


図9 東大寺本坊経庫桁行断面図  
【修理工事報告書】

せ、大梁から側面校木の上より二段目に各面二丁の繋梁が入る。大梁上に束をたてて二重梁とし、繋梁中間に梁行の束踏がのるが、これは二丁とも当初の転用材で、この上に三カ所束を立てて母屋桁を四面に廻す。二重梁上に棟束を立て野肘木で棟木を受け、寄棟造の隅木を架ける。<sup>(17)</sup>

木を受ける。妻飾は現在慶長大修理時の虹梁大瓶束にかわっているが、本来は当然金堂同様の又首組であつたはずである。<sup>(14)</sup>

唐招提寺金堂 桁行七間、梁間四間、寄棟造、奈良時代末期の建立、一重仏堂の代表的遺構と考えられており、内部は入側柱上に二手先を組み、大虹梁を渡し、暮股に折上組入天井を張り、屋根は寄棟造とする。明治三一・三二年の解体修理で小屋組は合掌小屋組に改められて旧状は明確でないが、入側桁間に大梁を渡し、二重梁束立て構造と推定されている。<sup>(15)</sup>

元興寺僧房 奈良時代の元興寺僧房は元興寺極楽坊本堂および禅室の

屋を受け、その上に二重梁を渡し、二重梁上の棟束・野肘木で棟木を受けたものと復原されている。<sup>(16)</sup>

古代の蔵 古代の蔵は正倉院宝庫、法隆寺綱封蔵、東大寺本坊経庫、唐招提寺経蔵をはじめ、かなり残されているが、大部分は校倉である。そのうち、唐招提寺経蔵が合掌構造、現在二重梁である東大寺法華堂経庫がもと合掌構造であつた痕跡をもつが、その他は二重梁、正倉院宝庫は三重梁束立て構造である。

東大寺本坊経庫 奈良時代の校倉、もと油蔵の宝蔵で正徳四年（一七一四）に移築された。大梁は梁行に二通りを上から二段目の校木にの

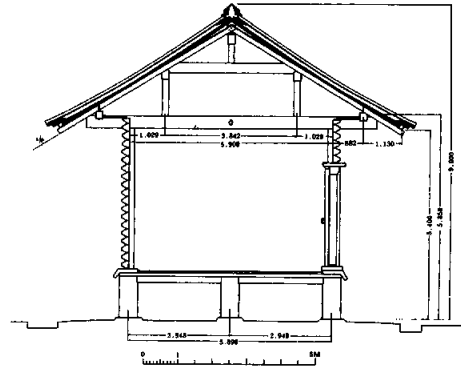


図10 東大寺本坊経庫梁行断面図  
【修理工事報告書】

手向山神社宝庫 もと油蔵に東大寺本坊経庫と並んで建っていたもので、同時代の校倉、安永九年（一七八〇）に解体され、文化十一年（一八一四）から同一三年に再建され、石垣を含めて文政三年（二八二〇）に移築が完成した。二重梁構造であるが、昭和三一―三三年度の半解体修理の際に大梁から側面校木上へ中央の繫梁とその左右にも繫梁を復しているが、本坊経庫の解体修理の所見によると、繫梁は本来各面左右二丁ずつのみとすべきであったらしい。二重梁は虹梁型の当初材で野肘木はない。<sup>(18)</sup>

東大寺勸進所経庫 もと東大寺法華堂経庫とともに地藏院内の庫蔵であった校倉で、貞享四年（一六七八）に移築されている。小屋組は当初材と中世材があるが、二重梁束立で構造で、東上にすべて舟

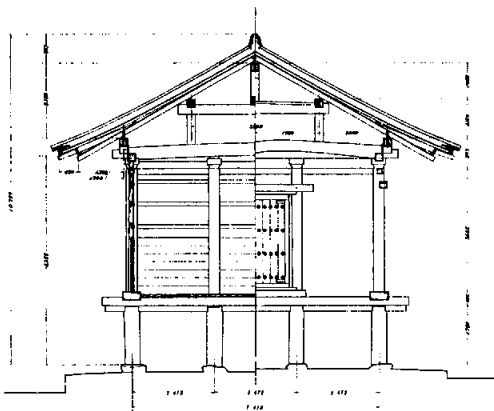


図11 法隆寺網封蔵梁行断面図  
【修理工事報告書】

肘木をのせる。隅肘木は下端の刳形がなく、中間は肘木形に作り、桁行梁行ともに大梁・繫梁上に東路が井桁に生まれ、東路の上の東で母屋桁を受けている。<sup>(19)</sup>

唐招提寺宝蔵 同寺経蔵と違って改造の痕はなく、本来二重梁束立で構造で、大梁から梁行繫梁各面二丁ずつを出して先は校木上にのせ、二重梁両端にのる母屋桁を四方に廻し、繫梁上の東で母屋を受け、肘木は用いていない。出桁の出は四方同じであるが、地軒の出は桁行と梁間に差があり振隅となる。<sup>(20)</sup>

法隆寺綱封蔵 桁行九間、梁間三間の寄棟造、高床式の蔵で、両端各三間を蔵、中間三間を吹放しとする雙倉の遺構である。東柱上に台輪を廻し角柱を立て、柱間を土壁とし、中間吹放しに向かつて扉口を開き、軒・小屋組は全体を通して寄棟造とする。後世の修理改造も著しく、北倉は大永三年（一五二三）に火災で焼損し、修理前は九間全体を囲んで蔵としていたが、昭和三七



四一年度の解体修理の際の調査によると、中央三間は吹放して、大梁・二重梁の古材があり、当初二重梁束立て構造であった。礎石下出土の軒瓦から平安時代初期の建立と考えられていたが、この軒瓦は最近の調査の編年では奈良時代に含まれるので、建立年代は奈良時代末乃至平安時代初頭と考えられる。<sup>(21)</sup>

正倉院倉庫 桁行九間の両端各三間を校倉、中間を板倉とし、大正二年解体修理の際に、小屋組は西洋風小屋組に改めている。浅野清氏は小屋組に再利用されている古材を調査されその構造を復原されている。修理前の図面によると三重梁束立て、一部は三重梁上を又首組とし、二重梁下には両端のほか中間に三本の束が立ち、三重梁下にも中央に束が立っていた。大梁・妻梁・隅行梁・丸桁・同肘木・隅木・垂木は、本来の用途に古材が残り、束・合掌・母屋などに二重梁・三重梁・母屋・棟木・束が転用されている。母屋には中古材が含まれるので建立後、早い時期に修理を受けている。復原された構造は三重梁で、大梁は先端に出桁を受けて校木にのり、二重梁・三重梁の両端に母屋を組み、出桁・棟木間に母屋が二通り入る。<sup>(22)</sup>

法隆寺金堂、同中門、唐招提寺金堂、元興寺僧房、東大寺本坊経庫などの校倉、法隆寺綱封蔵は二重梁構造であったが、この手法が寄棟造・入母屋造の身舎上方屋根内部の一般的構造であったと考えられるが、特に身舎の梁間の深い大規模の建物の場合には正倉院宝庫のように

三重梁とする場合もあった。寄棟造の場合は二重梁・三重梁先端で受ける母屋が四方に廻って問題はないが、入母屋造では、棟木・二重梁両脇の指桁のほか、三重梁の両端にのる母屋も指桁となるとすれば、妻飾を又首組とすると又首棹に指桁受けの組物を二カ所置くか、虹梁を重ねる必要を生じる。三重梁構造は寄棟造の場合に限られ、天井があれば仏堂では下から見えず、蔵の場合は外観上の問題はないが、一部の建物に限られたらしい。入母屋造の場合は大規模建物でも二重梁で納めたのではなからうか。

梁が三段となれば虹梁纂股構造では三重虹梁となる。「年中行事絵巻」、『信貴山縁起絵巻』に見える平安宮の建礼門・待賢門等は三重虹梁纂股風に描かれ、桁隠も一方に四個ほど付いており、指桁が多かったように思われるが、梁間三六尺の東大寺転害門も妻飾は二重虹梁纂股で、中間の母屋桁は一通りである。側柱上の組物を出組とすれば、桁隠が真桁と出桁に並んでいたかもしれないが、梁間二間の門にこのような三重虹梁纂股様の納まりがあったかどうか疑問で検討の余地がある。いずれにしても三棟造にはならないのではなからうか。<sup>(23)</sup>

#### 又首組・合掌

二重虹梁纂股、二重梁束立て構造とともに多く用いられた構造は又首組・合掌構造である。

伊勢神宮正殿 妻飾は梁上に又首組で組物はなく、又首組の上端で棟

木を直接支え、妻飾の外に独立して棟持柱が立つ。神宮の正殿は別宮正殿ともほとんど神明造で妻飾は又首組である。中世の別宮正殿の形式については福山敏男氏の研究によると、荒祭宮正殿など板倉造であったものが多いが、これらの妻飾も内部も梁上に又首束の立つ又首組であった。中世の外宮正殿については福山氏によって応永三〇年（一四三三）写しの「外宮正殿庭作日記」が紹介されているが、神明造で、いのこさす八し（支）とうだつ（丁数記されず）が見え、内部の梁上にも束の立つ又首組であったと思われる。現在の正殿では内部は虹梁に束立てとなつてゐるらしい。古くは内部は束のない合掌組であった可能性が高いのではなからうか。<sup>(24)</sup>

法隆寺廻廊 廻廊は柱上に平三斗をのせ、その肘木と組んで円弧状に反る大虹梁を架け、合掌を組み、上に三斗をのせて棟木を受ける。隅は隅行ききの虹梁を用いず、隅の間は大虹梁から側桁に梁を渡し、束を立てて三斗をのせ、棟木組手を受けてゐる。<sup>(25)</sup>

山田寺廻廊 東面廻廊で倒壊した建築部材が発掘され、その構造が明らかとな

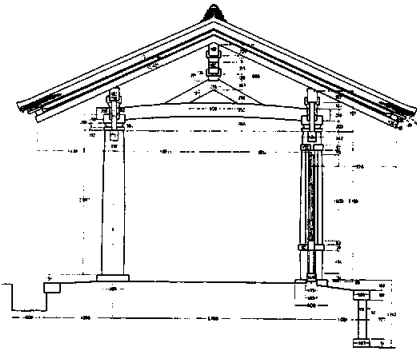


図12 法隆寺廻廊断面図  
【修理工事報告書】

った。大虹梁が残存せず、合掌の古材も確認されていないが、下端に四角の柵穴をもつた斗があり、この柵穴に合掌の拝みが納まったと考えられ、組物は平三斗、合掌構造で、平三斗で棟木を受けていたと推定されている。<sup>(26)</sup>

東大寺法華堂 天平一〇年代の建立と考えられ、正堂は入側柱上に内外に出組を組み、大虹梁に暮股をのせ、天井桁を組み、折上組入天井とする。天井桁は二重梁を兼ね、当初この上に合掌を組んで拝みに肘木をのせて棟木を受けていたと推定されている。入側桁には上端前角近くに後上方からの方向に斜にほり込んだ欠欠みと後面の天井組子の仕口が交互にあり、ここで垂木が継手になり、棟木からくる上方垂木尻をこの欠欠みに引掛けて下方垂木は上方垂木の上に添わせて継いだものと考えられている。上方垂木は合掌の働きを補強する意味があるのであろう。法華堂には久安四年（一一四八）と正治元年（一一九九）の棟木銘があり、久安には棟木を大きくして肘木上端を削り、合掌を再用、正治には合掌を丸い棟束に改め、貫を通し、貫から天井桁の土居に割板をかけて内屋根としてゐる。<sup>(27)</sup>

法隆寺東室 建立時に円柱座造出し凝灰岩礎石を反転して転用し、柱にも多数の旧材を転用し、桁行柱間寸法に大小の差があることは、『古今目録抄』にすでに「東室者間寛狭不定ナリ」と注目されているので、桁類にも古材が多数転用されていたと考えられる。昭和三二、三三年度の解体修理前は度々の修理改造のために旧形を失っていた

が、修理時の綿密な調査によると、二間を一坊とし、本来は土間で、房境は身舎を陸梁とし、中央に棟束を立てて棟木を受け、房中間は廻廊と同形式の全体に緩くわん曲した大虹梁を架け、合掌を組んで棟木を受けた当初の構造が判明し、一部で床を除いて構造・間取が復原され(本来は土間であった)、復原模型が製作されている。<sup>(28)</sup>

新薬師寺本堂 身舎梁間を三間とするのは東大寺大仏殿以外に類例がなく、桁行七間、梁間五間、入母屋造とする。身舎の梁間は当時の尺で三〇尺、大斗肘木に長い大虹梁を架けて合掌を組み、中間一カ所に母屋桁を受ける斗・肘木がのり、合掌拌みにも斗・肘木をのせて棟木を受ける。妻飾の手法も珍しく、身舎側面入側桁に直接又首組を組み、大斗肘木をのせて棟木をうける。このような妻飾の手法は現存遺構ではこれだけであるが、簡単な手法であり、古代の入母屋造では附属的建物などの妻飾にこのような手法をとる場合が多かったと思われる。<sup>(29)</sup>

当麻寺前身曼荼羅堂古材転用建物  
平安時代初頭の前身曼荼羅堂建立の際に転用された古材から復原さ

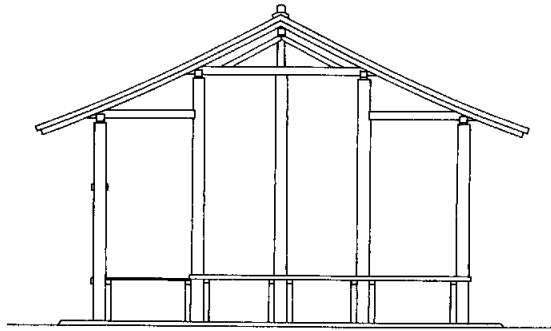


図13 当麻寺前身曼荼羅堂古材転用建物復原側面図

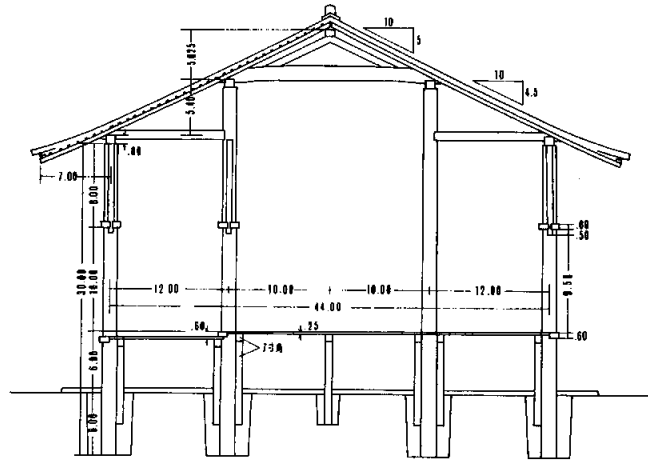


図14 当麻寺前身曼荼羅堂古材転用建物断面図

と推定している。そのほかの内部大虹梁は合掌の仕口のみあり、束はない。棟木下端に山型の枘穴があり、合掌の拌みに上からかぶさるように棟木がのり。内法上の丈の高い建物で、宮殿関係建物の古材と考えられ、奈良時代の掘立柱建物の構造を良く示している。<sup>(30)</sup>

東大寺法華堂経庫 もと東大寺地藏院に現勧学院経庫とともにあった校倉で、文祿年間移築され、当時手向山八幡宮の所属であったが、維新後東大寺の所有になった。中世に床束・台輪・校木の一部、大梁か

れる建物は、掘立柱と推定され、組物を用いず、柱上に桁をのせ、桁の上に大虹梁を渡し、内部は合掌組で、棟木下端に山型の枘穴があつて合掌先端にかぶさるようにのり、妻飾は陸梁上に又首組を組む。内部の大虹梁一丁に棟束の枘穴をもつものがあり、間仕切に当たるもの

ら上部の構造を取替え、移築後、享保二三年（一七二五）に軒を改造し、野小屋を設けている。現在二重梁束立て構造であるが、当初材の棟木下端両脇に合掌拌みに収まる山型の仕口がほられ、当初大梁上を合掌構造としていた。<sup>(31)</sup>

唐招提寺経蔵前身建物 昭和二五―二七年度の唐招提寺経蔵解体修理の際に、浅野清氏によって調査され、複雑な経過が確認された。校木上に置かれた両妻の側桁に又首組と羽目板の仕口があつてもと又首台であり、大梁二丁にも合掌仕口があり、棟木転用の丸桁、丸桁含みのある通肘木が桁行側桁に使われ、当初切妻造の校倉で、妻飾は又首組、内部は合掌組であつた。床束の古い当り型の径が約一

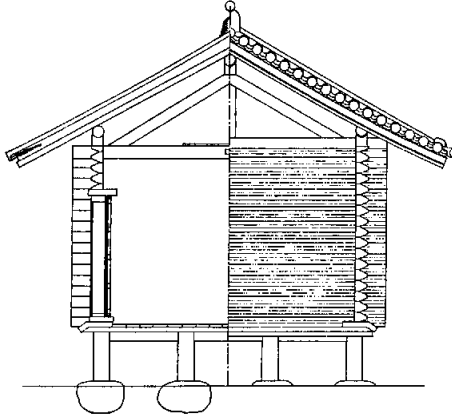


図15 唐招提寺経蔵前身建物復原図  
浅野清「法隆寺建築の研究」

尺位と細かつたから、当初掘立柱であつた可能性があると思われる。承和二年（八三五）の「招提寺建立縁起」の甲倉の項に、「右地主屋舎」とあるものの一つに当り、新田部親王旧宅に属していたものと解されている。<sup>(32)</sup>

唐招提寺経蔵 切妻造の前身建物を改造し、寄棟造としたもので、修理前は二重梁束立て構造となつていた。小屋組はほとんど古材の転用で、工法も不完全なものであつた。寄棟造に改造する際、床束を太い材に取替え、

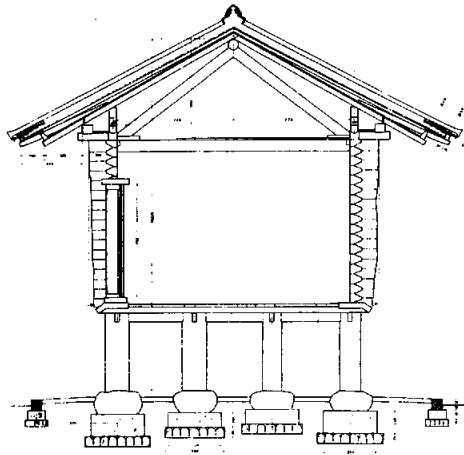


図16 唐招提寺経蔵梁行断面図  
「修理工事報告書」

梁・通肘木の端に継木をして出桁を廻し、隅木を入れて軒を廻した。旧地隅木に飛檐隅木取付痕があり、二軒に復原されている。棟木に隅木取付痕、下端に

合掌仕口があり、改造後も合掌構造であつた。桁、梁端の継木、母屋・垂木などに別建物の梁・棟木・隅木・垂木が転用され、これらは次項のような構造の簡単な別の寄棟造建物の古材であつた。<sup>(33)</sup>

唐招提寺経蔵転用寄棟造建物 切妻造の唐招提寺経蔵前身建物を唐招提寺経蔵とした際に、別の建物の古材を転用して切妻造を寄棟造に改造した。この古材は側通り桁二丁、妻通り桁一丁、梁断片二丁、棟木らしい断片一丁、隅木三丁、垂木六十五丁で、寄棟造の建物と考えら

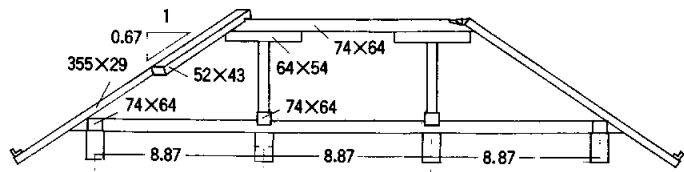


図17 唐招提寺経蔵転用建物復原桁行構造図  
浅野清復原より作図

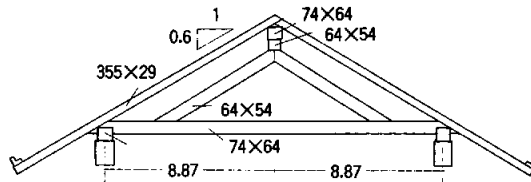


図18 唐招提寺経蔵転用建物復原梁行構造図  
浅野清復原より作図

ていた。桁行は五間とみるのが妥当と考えられ、柱間は桁行天平尺九尺（曲尺八・八七尺）五間、梁間八尺二間と推定されている。桁行五間とすれば一般庶民の住居にはやや大きい方と思われるが、簡単な寄棟造の構造を示す唯一の実例である。新田部親土旧宅にあった付属的な建物と考えられよう。古代建築構造に新しい一例を加えた点においても貴重な復原であった。<sup>(34)</sup>

れた。浅野清氏の復原によれば、側通り桁には円柱の当り型と枘穴、上面に梁仕口、上下面にえつり穴があり、梁断片には合掌の二枚枘仕口があり、桁を組廻し、梁を架け、梁上に合掌を組み、合掌の手に肘木をのせて棟木を受け

大神神社摂社大直祇子神社本殿 もと大御輪寺本堂で、現在桁行五間、梁間五間、寄棟造、本瓦葺の大規模な建物であるが、古代にさかのぼる古材を転用されていることは早くから知られ、桜井敏雄氏は内陣部五間二間の独立した建物と、その前に礼堂があったのではないかと推測され、内陣部の建立年代は奈良時代と考えられ、外陣虹梁上に葦股を入れたのは鎌倉時代と推定されている。

昭和六十一年平成年度の解体修理の際の調査によってその変遷が明らかとなっている。柱・妻梁・桁・棟木・垂木・長押などに奈良時代にさかのぼる古材があり、当初内陣部分は桁行五間、梁間二間、切妻造で組物はなく、礎石上に建ち、柱に直接桁・梁のり、妻は又首組、内部は合掌で棟木を直接支え、恐らく椀皮葺であったと考えられた。さらに別の建物に属する桁・棟木・内法長押があり、これらは別の建物、桁行恐らく五間、梁間二間、同じ構造の建物に復原され、礎石は残っていないが、基礎の土層が前面まで延ており、二棟が前後に建って雙堂となっていたと復原されている。

後堂はその後、平安時代後期頃、柱上に舟肘木を入れ、妻は妻梁上に束を立て、舟肘木で二重梁を入れ、梁両端に母屋桁を組み、二重梁上を又首組として、内部は母屋・棟木別個に大梁上に束立てに改め、母屋・棟木の間柱に柱心の方杖風の又首棹を入れ、鎌倉時代初期に前堂を撤去して入母屋造、妻入りの外陣を設け、外陣側柱上の組物は平三斗、入側柱上は内側に向けて出三斗とし、桁行に三間の大虹梁を架け

て葦股をのせ、天井桁を廻して折上組入天井とし、正面妻飾は又首組、外陣棟木を後堂棟木に架け、屋根をT字形として軒を外陣三方に廻し、正面には向拝を付け、木瓦葺とし、後堂も同様に木瓦葺に改めて大改造を行った。さらに弘安八年（一二八五）に外陣柱に継木をして軒廻り・小屋組を改造し、四方に軒を廻し、現堂のような寄棟造本瓦葺にあらためた複雑な変遷状況が解明されている。

当初前堂・後堂とも組物を用いず、桁に梁をのせ、妻は又首組、内部は合掌とした簡単な当麻寺前身曼荼羅堂古材転用建物などと同じ構造であったが、後堂部分の礎石には移動据替えがなく、当初から礎石建ちであった。このような簡単な構造では掘立柱とした方が構造的に安定すると思われるが、このような簡単な構造で礎石立ちとすること<sup>(35)</sup>もあつたことが明らかになった。

奈良時代の石山寺本堂 現在の本堂は永長元年（一〇九六）の建立であるが、奈良時代天平宝字五・六年（七六一〜二）に桁行五間、梁間二間の仏堂を解体し、周囲に庇をめぐらして桁行七間、梁間四間の仏堂に改築された。この改築には古材も使用しているが、福山敏男氏は造営文書を復原され、仏堂の身舎の茅負（棉栂）、垂木には反りがあつり、庇のものには反りがなかつたから、身舎と別に庇の屋根があつたとされており、庇は裳階風に扱われていたことになる。福山氏が復原された天平宝字六年閏十二月二十九日の秋期告朔に見える新しく切出した材のうちに佐須九枝があり、同記録の田上鑑懸山作材の佐須九枝

がこれに当ると思われるが、四枝と五枝で寸法が違い、四枚は長一丈六尺、広五寸、厚四寸、五枚は長一丈、広六寸、厚四寸であるが、入母屋造とすれば妻の又首棹四丁と又首束二丁、中間合掌八枝を要するので、一部は従前の仏堂の古材を再用したのであろう。身舎が寄棟造であつたか、入母屋造であつたかは、古材をどのように転用したか明らかでないので明確ではないが、又首・合掌構造で恐らく入母屋造であつたと思われる。新たに作られた角木四枝は長二丈四尺あり、身舎寄棟の隅木としては長いので、庇の隅木に用いたのであろう。この仏堂は改築後に礎石立ちとなつたが、大神神社摂社大直祢子神社本殿の前身建物のような組物のない構造であつて、これも礎石建ちとした簡単な構造の一例となろう。<sup>(36)</sup>

室生寺金堂 平安時代初期、九世紀頃の桁行五間、梁間四間、正面孫庇付の建築で建築年代は明確でない。正面の孫庇とともに全体を寄棟造の屋根とする。孫庇が当初からあつたかどうか明らかでないが、鎌倉時代には取付いていたことが知られている。身舎側面を大虹梁として中間に柱を立てないが、大虹梁上に両端は又首、内部は合掌を組み、舟肘木で棟木を受けており、もと入母屋造であつた。又首棹・合掌に反りがあるのは珍しい。大虹梁一丁、西妻の又首束と同北側又首棹、内部の肘木二丁、東方二間の棟木に古材が残る。合掌に反りの付く例は玉虫厨子・法隆寺金堂妻飾に古い類例がある。<sup>(37)</sup>

法隆寺東院礼堂前身建物 現在の礼堂は寛喜三年（一二三二）の再建

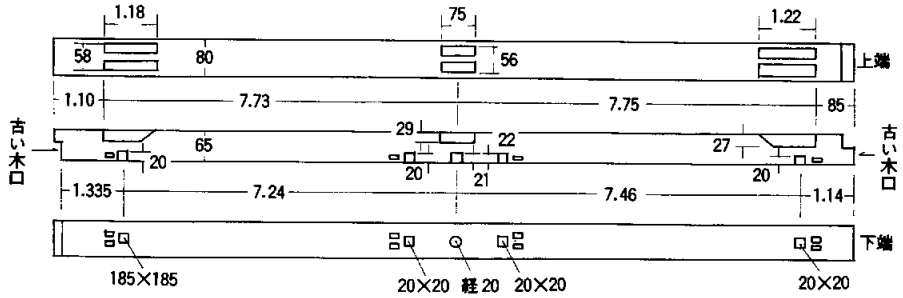


図19 法隆寺東院礼堂転用梁  
【報告書】挿図より作図

であるが、天平宝字五年（七六一）の「法隆寺縁起資財帳」によると、その前身は松皮葺門二間のうちの棟、「長七丈、広二丈一尺」に当り、その後、貞観元年（八五九）に道詮による改築を受けている。昭和九・一〇年度解体修理の際の発掘調査によると、当時の中門は掘立柱で、桁行七間、梁間二間、中央柱通りは妻柱以外柱痕なく、桁行各間九・七八尺、総間六八・四五尺（天平尺七〇尺）、梁間二一・三三三（天平尺二一・五乃至二一・〇）であった。

第二期の道詮改築と考えられる建物は、礎石下根石が発見され、礎石建ちに改められている。桁行は五間となり、梁間二間、第一期

と同様に妻柱以外中央列に礎石痕なく、後に前面に庇が付き、桁行各間九・七五尺、梁間一七・六五尺、庇の出一六・四七尺であった。礼堂には又首台の古材が転用されていた。松材が三丁、同形状の松材二

丁が発見されたと報告されているが、残念ながらこれらの古材は修理の際に別木材に使われて現存しない。報告書にそのうち一丁の図と写真、古材一覧表があり、これによると、丈〇・六五尺、幅〇・八〇尺の平使いの陸梁で、両端に合欠上木の仕口旧木口を残し、ここで桁と組合い、合欠間一七・一七五尺、上端に又首束と又首樟の二枚枅があり、下端中央に経二寸の丸枅穴、丸枅の両方にえつり穴二と角枅穴二がある。丸枅穴はや、細いものの柱天の枅穴と考えられるが、角枅穴はえつり穴と並び、えつり穴の方が柱寄りにあるところもあって両立せず、本来中央の柱天に肘木なく、直接柱天に桁がのつていたのであろう。報告書に掲載のえつり穴のある図は妻梁らしいが、いづれにも中央上端に又首束の仕口があったようで、大梁上が内部も又首組であったことになる。えつり穴は古い手法であり、又首仕口も古風の二枚枅であるので、松材のものは貞観改築時に当初の材を再利用し、この時えつり穴を廃して肘木を入れたと考えることも出来よう。

当初は組物なく、柱の上に直接桁をのせて梁と組み、又首組とした簡単な構造であったが、貞観改築には舟肘木或は大斗肘木を入れた可能性がある。

このほかに長い松材の虹梁が二丁あり、柱間は一六尺ほどと考えられ、二期の門の正面に付いた庇の虹梁と考えられているが、虹梁上端中央に二枚枅があり、ここに束を立て肘木をのせて母屋桁を支えたものと考えられる。また別に桁材と、上端が低い山型に作られ、約二尺間隔

にえつり穴のある垂木が礼堂の支外垂木や庇垂木に多数使用され、木負・茅負古材もあつたようであるが、詳細は報告されていない。桁は垂木割が九寸七〇八分であり、九・七八尺ほどの柱間に相当し、報告書の見取図によると蝶羽桁で、妻梁との相欠上木仕口があり、肘木の太納穴と当り型があつた。庇の桁であつた可能性が高いと思われる。

東院礼堂前身建物の第二期中門は貞観元年改築と考えられる。一部の材は前記のように更に古い当初の材も残っていたと思われるが、現在では明らかに出来ない。第二期建物は妻飾および内部とも束の立つ又首組であつたらしい。奈良時代創立時の中門においても桧皮葺、掘立柱であつたから、同じように簡単な構造と思われるが、第一期中門は内部の梁上に束の立たない合掌構造であつたかと考えられる。第一期・二期とも親柱通りに柱が立たないことが特色である。<sup>(38)</sup>

法隆寺妻室 東室の小子坊で、奈良時代には東室に小子房はなく、平安時代、恐らく保安二年(一一二二)の東室改修時頃の建立と考えられているが、後世に甚しい改造を受け、大破して旧形を全く失い、物置同然の状態であつたが、昭和三四〜三八年度解体修理によつて復原されている。古材の棟木下端に又首樟の拌みの仕口と筋違の傾いた大入れ仕口がある。梁は大部分桁に転用されていたが、陸梁で、上端に又首束の一枚枘、又首樟の傾大入仕口があり、各柱通りとも棟通りに柱が立ち、又首束の立つ又首組に復原されている。<sup>(39)</sup>

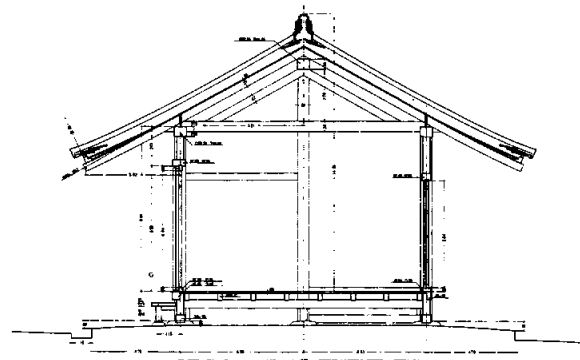


図20 法隆寺妻室断面図  
【修理工事報告書】

板葺建物の合掌構造 奈良時代の小屋組構造の一手法に藤原豊成板殿で復原された合掌構造がある。これは紫香樂にあつた五丈殿を石山寺が購入し、解体運搬して石山寺の食堂にあつたものである。正倉院文書による奈良時代における石山寺の造営については福山敏男氏が詳しく研究されているが、その中で五丈殿は関野克氏によつて復原されている。この建物は桁行五間、梁間三間、柱の上に梁を渡し、その上に桁を通し、垂木(佐須)の拌みに棟木をかぶせるようにのせ、妻ではこれに又首束が立ち、合掌上に小舞をのせて板葺としていた。同時に



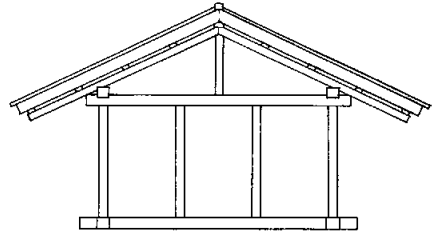


図21 石山寺法備国師奉入板殿復原側面図

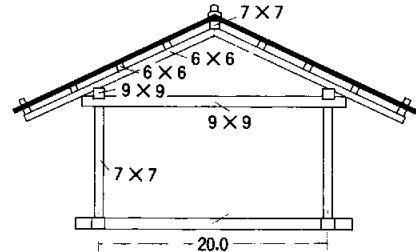


図22 石山寺法備国師奉入板殿復原断面図  
関野克復原より作図

石山寺に移  
建された法  
備国師奉入  
板殿では土  
居桁（土台）  
があり、土  
台を組んだ  
上に柱を立  
てていた。<sup>(40)</sup>

平城京左

京九条三坊条間路と東堀河の交叉点の発掘調査で、橋の材とともに発見された桁の焼損古材は、藤原豊成板殿と同様の構造であった。この桁では柱通りのみ合掌が桁の前角に引掛かるように、桁の前角に駮を残して上端に斜の欠込みをほる。合掌下端には桁の前角の駮に引掛かるように溝をほり、緩い勾配の合掌の上に小舞を並べて板葺としたと考えられる。奈良時代の記録にしばしば見られる板屋はこのような構造の板葺と考えられ、宮殿官衙の小規模の附属建物や小規模住宅の多くはこのような構造であったと思われる。<sup>(41)</sup>

この種の梁・桁・合掌による構造は平安時代になると、疎垂木小舞裏構造としてひきつづき広く用いられるが、これについては稿を改めて述べたい。

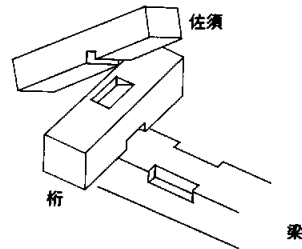


図23 桁・梁・又首の組手

茅葺の合掌構造 建物の屋根は瓦葺・板葺・椀皮葺のほか、茅葺があり、これが最も多かったであろう。茅葺の屋根構造は伝統的民家では勾配の強い合掌構造が一般的で、一部では棟束を併用する。<sup>(42)</sup>合掌構造は竪穴住居までさかのぼると考えられているが、竪穴住居では垂木は地面まで達し、桁・梁に合掌（又首）をもたれかけて先端をくくり合わせ、ここで棟木を支承することになる。垂木（合掌）が地面から離れて梁上に合掌が組まれるようになると、建物の周囲は壁で囲まれるようになり、合掌は梁から立つことになる。<sup>(43)</sup>

梁行方向の前後二本の合掌と桁行方向の三本をくぐれば構造的に安定し、左右の二組の上に棟木をのせれば合掌構造の骨組が出来る。民家の合掌構造の基本も同様に考えられており、尾張の古民家ではこの合掌に当る位置の柱を太くする手法が紹介されている。<sup>(44)</sup>桁行が長くなれば、中間に梁行方向の前後の合掌をくくり合わせて棟木中間を支えることになる。両端の三本の合掌が又首椽と又首束になると切妻造の又首組となり、中間は束のない合掌構造となるので、茅葺小屋組構造と切妻造の又首組の手法には深い関連があり、古代の切妻造の妻を又首組、内部を合掌とする構造は本来茅葺の合掌構造に起源があるのではなからうか。もともと切妻造の又首組の構造は桁行方向に不安定

であるので、伊勢神宮の杜殿の古記録では向又首が用いられているのも、この不安定に対する補強として必要かつ効果的なものであったからであろう。

社寺建築等に見られる又首組や合掌構造は本来中国で発達し、半島から導入されたと考えられる。人字形割束もその一例であろう。わが国で茅葺下地から直接又首組が発展したとは考え難く、法隆寺金堂・玉虫厨子妻飾や回廊に用いられており、恐らく飛鳥寺金堂・回廊にすでに導入されていたのであろうが、それ以前から半島を通じて導入され、宮殿建築などに用いられていたかもしれない。<sup>45)</sup>

身舎の大梁上の小屋組構造について、現存する遺構を中心として各種の工法について述べたが、その主要な方式を分類すると次のようになる。

二重虹梁纂股

二重虹梁斗式

二重梁・束立て

又首組・合掌

板葺建物の合掌構造

茅葺の合掌構造

棟持柱

棟束

切妻造では二重虹梁纂股式が最も格式の高い構造であった。従って

掘立柱の場合に用いられることは少なかったと考えられるが、その例として法隆寺東院舍利殿および絵殿前身建物があるので、建物の重要度に応じて用いられることがあった。

廻廊では単廊の場合、法隆寺廻廊の合掌構造のほかに、飛鳥の坂田寺では、虹梁中央に纂股を用いた例が発掘調査で明らかになっている。梁間が狭い場合は合掌よりも纂股の方が適当であったのであろう。

八脚門では現存する二棟がいずれも三棟造であるため、一般に三棟造が多かったと考えられている。複廊でも築地廻廊をふくめ三棟造であったと考えられ、中世の遺構であるが春日大社本社廻廊が複廊で、北廻廊の一部を除いて虹梁に纂股をのせた三棟造である。三棟造の場合、妻飾は二重虹梁纂股とし、内部は両側の中間棟木の上に梁を架け、束を立てて棟木を受けたと考えられるが、東大寺法華堂の例を見ても二重虹梁上を合掌組としたものもあつたかもしれない。

もつとも八脚門あるいは五間三戸門が必ずしも三棟造であつたと考へることはなからう。法隆寺東院中門創建建物は七間二間で、妻柱以外親柱筋に柱がなく、第二期中門も梁間二間で同様に中間に親柱がない。唐招提寺講堂地下の門跡の遺跡も妻柱以外親柱筋の柱がない。これらは三棟造とならないと考えられ、特に奈良時代の東院創建中門と講堂地下遺構は、妻飾又首組、内部合掌ではなからうか。

現京都御所の承明門は五間二間で親柱は長く棟持柱方式であり、兩脇廻廊とともに三棟造ではない。梁間二間の門の構造手法は二重虹梁

簀股で三棟造であったと限らず、これは宮や官の大寺などの重要な門に限られ、むしろ一般には又首・合掌組が少なくなかったと思われる。梁間が狭く、虹梁上に簀股をのせる高さのゆとりのない場合は、法隆寺食堂および細殿前身建物のように、虹梁の上に斗だけを置いた。この場合、内部は合掌とし、側桁・棟木中間の母屋桁はない。妻飾を二重虹梁簀股とし、内部は合掌とした組合わせもあったかもしれないが、実例はない。この場合、中間に母屋桁が入るとすれば、合掌中間に三斗を置いて母屋桁を受けることが必要となる。

二重虹梁簀股は当麻寺前身曼荼羅堂のように奇棟造にも用いられた。もつともこの場合身舎側面中央柱上から、両脇大虹梁に向けて半截の大虹梁が入り、母屋桁が四方に廻り、その隅は持放しとなっている。入母屋造でも唐招提寺講堂のように切妻造の建物を移築改造した場合、内部は二重虹梁簀股をそのまま残し、側面にも繫虹梁を入れ、母屋桁を四方に廻したが、妻飾は又首組に変更している。

絵巻物に見える平安宮の門は三重乃至四重虹梁簀股風に描かれている。特に破風の下端に多数の桁隠を並べて描いているのも、母屋桁の数が多く、平三斗ではなく、手先にも桁を通していたことを示すように見られる。しかし、東大寺転害門のような梁間の最大級の八脚門であつても、妻飾は二重虹梁簀股で納めているので、梁間二間で絵巻物のような三重あるいは四重虹梁簀股の工法が実際に行われたかどうか検討の余地があるが、『年中行事絵巻』ばかりでなく『平治物語絵巻』

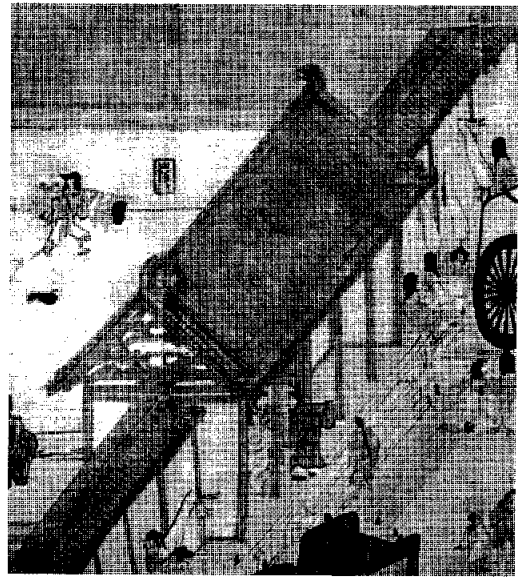


図24 『年中行事絵巻』に見える平安京侍賢門

『信貴山縁起絵巻』、『松崎天神縁起』にも同様に描かれているので、三重虹梁も一がいには否定出来ないであろう。

身舎に天井が張られ、上部が野構造になる場合および校倉などの奇棟造の蔵の多くは二重梁束立て構造が用いられた。梁間の広い正倉院宝庫では三重梁が用いられた。もつとも妻飾を二重梁としてその上に又首組を組む手法もあったかもしれない。

最も広く用いられたのは又首・合掌構造で、この場合妻飾には又首束を立て、内部は合掌として束を用いないのが古い本来の手法と考えられる。妻は束を加えて三本で組み、中間は合掌のみとする手法に、

古い茅葺構造と関係があるのではないかと考えられることは先に記した。

又首・合掌構造は切妻造・入母屋造に広く用いられたが、寄棟造の例としても唐招提寺経蔵、東大寺法華堂経庫（中世二重梁束立てに改造）、唐招提寺経蔵転用寄棟造建物があり、寄棟造にも用いられた。

二重梁を葦股・束で受け、その上を合掌とする例も東大寺法華堂内部天井上、元興寺復原僧房妻飾にあるが、この手法はそれほど普及しなかったと思われる。複廊の廻廊などでは虹梁上を葦股のかわりにそれぞれを合掌とした例もあったかもしれない。

一般の建物に多く用いられたと考えられる手法に板葺建物に用いられた合掌構造がある。桁前角に合掌下端を引掛け、合掌拝みで棟木を支承するもので、合掌上に小舞を渡して屋根板を受けた。当時一般の住宅や付属的建物などに広く用いられた手法であろう。

このほか地上から立つ棟持柱で直接棟木を支えた例も原史時代以来にさかんに用いられたが、奈良時代となると棟持柱は一般的な手法ではなくなった。棟持柱で棟木両端を支えれば、構造的な妻飾や中間を支える構造の必要がないので、全体を升のように使う倉の場合など妻は単に閉塞すればよいから、小さな倉には特に適当な手法であったと思われる。伊勢神宮では棟持柱と別に妻飾を又首組として、内部でも柱通りごとに棟木を支承しており、棟持柱は構造的には必ずしも必要としな思われるので、この棟持柱は特に長く出た螻羽を支えるこ

とが目的で、本来の屋根は土器刻画や家型埴輪のように転びの強いものであったかもしれない。

棟木を大梁上に立つ棟束だけで支える例は法隆寺東室の房境に復原されているので、この手法も奈良時代からあったが、この場合陸梁下の中央に柱が立ち、棟の荷重は棟束を通して直接柱に伝えられるから、又首組における又首束の場合も基本的には下に柱が立つ場合に用いられたものであろう。平安時代になると又首束を用いることが多くなり、中世・近世の春日大社の着到殿・車舎・直会殿などでは下に柱がなくとも束を立てて又首組とする。法隆寺東院礼堂前身の第二期中門、同舍利殿および絵殿前身建物でも妻飾以外に束の立つところがあったようである。これがやがて一般的になるのであろう。四脚門や棟門では妻虹梁または男梁の上に板葦股をのせて棟木を支えたが、棟持柱であれば直接棟木が支えられた。

茅葺であった古い建物は現存せず、発掘調査においてもこの時代の茅葺の梁などの古材は未発見であるが、現在の茅葺の伝統的農家の小屋組と大差ない合掌構造であったと思われる。

以上で奈良時代を中心として屋根上部の内部構造の各種の手法について述べた。他にもいろいろの組み合わせがあった可能性もあるが、最も一般的な手法は板葺の合掌構造を含めて、又首・合掌構造で、妻飾は束を立てて又首組、内部は合掌組であったと考えられる。

注

- (1) 岡田英男「法隆寺経蔵」『奈良県文化財全集』法隆寺VII 奈良県教育委員会 昭和四十五年
- 沢村仁「経蔵」『奈良六大寺大観』第一巻 法隆寺一 岩波書店 昭和四十七年
- なお、鐘楼も楼造、二重虹梁葺股で、「資財帳」にも「一口鐘楼長三丈一尺広一丈八尺」と経蔵と同様に見えるが、延長三年（九二五）講堂とともに類焼し、「法隆寺政所并法頭略記」の観峯大徳、寛弘二年（一〇〇四）から一六年の間の再建である。
- (2) 『法隆寺国宝保存工事報告書』第八冊 国宝建造物法隆寺東院舍利殿及絵殿並伝法堂修理工事報告 法隆寺国宝保存事業部 昭和一八年
- 浅野 清「法隆寺建築綜観」便利堂 昭和二八年
- 同 「奈良時代建築の研究」第三編法隆寺東院伝法堂ならびにその前身建物の復原 中央公論美術出版 昭和四四年
- 同 「昭和修理を通して見た法隆寺建築の研究」 後篇第八章伝法堂とその前身建物 中央公論美術出版 昭和五八年
- (3) 注(2)に同じ
- (4) 『重要文化財海龍王寺西金堂経蔵修理工事報告書』奈良県教育委員会 昭和四二年
- 岡田英男「西金堂」『大和古寺大観』第五巻 秋篠寺法華寺海龍大寺 岩波書店 昭和五三年
- (5) 『法隆寺国宝保存工事報告書』第八冊 国宝建造物法隆寺東院舍利殿及絵殿並伝法堂修理工事報告 法隆寺国宝保存事業部 昭和一八年
- 浅野 清「法隆寺東院七丈屋の復原」『建築史研究』2 昭和二五年
- (6) 『国宝唐招提寺講堂他二棟修理工事報告書』奈良県教育委員会 昭和四七年
- 唐招提寺講堂は朝集殿当時切妻造であったが、移建の際、妻大虹梁を妻飾の又首台に転用し、入側通り丸桁に三個の斗を置いて受け、これに又首束、又首棹の二枚枘と指桁受け肘木止め太枘が残っていた。鎌倉時代建治修理では又首台を東受けに改め、又首組を片蓋に変更していた。
- (7) 『法隆寺国宝保存工事報告書』第一冊 国宝建造物法隆寺東大門修理工事報告 法隆寺国宝保存事業部 昭和一〇年
- 太田博太郎「東大門」『奈良六大寺大観』第一巻 法隆寺一 岩波書店 昭和四七年
- (8) 伊藤延男「転書門」『奈良六大寺大観』第九巻 東大寺一 岩波書店 昭和四五年
- (9) 『国宝当麻寺本堂修理工事報告書』奈良県教育委員会 昭和三五年
- 日名子元雄「当麻寺曼荼羅堂について」『大和文化研究』五巻一号 昭和三五年
- 岡田英男「当麻寺本堂修理工事の成果」『仏教芸術』四五 昭和三六年
- 同 「古代における建造物移築再用の様相」『文化財論叢』奈良国立文

- 化財研究所創立三十周年記念論文集 同朋社 昭和五十八年  
 同 「古代建造物の構造復原に関する研究」私家版 昭和六一年
- (10) 「奈良国立文化財研究所年報一九九一」 飛鳥地域の発掘調査 坂田寺  
 第六次の調査
- (11) 「法隆寺国宝保存工事報告書」第二冊 国宝建造物食堂及細殿修理工事  
 報告 法隆寺国宝保存事業部 昭和一一年  
 太田博太郎「食堂・細殿」『奈良六大寺大観』第一巻 法隆寺一 岩  
 波書店 昭和四七年
- (12) 注(11)に同じ。
- (13) 「法隆寺国宝保存工事報告書」第一四冊 国宝法隆寺金堂修理工事報告  
 法隆寺国宝保存委員会 昭和三二年  
 竹島卓一「建築技法から見た法隆寺金堂の諸問題」昭和五十年 中央  
 公論美術出版 昭和五十年
- (14) 沢村仁「中門」『奈良六大寺大観』第一巻 法隆寺一 岩波書店 昭和  
 四七年  
 岡田英男「法隆寺中門」『以可留我』1 法隆寺昭和資財帳編纂所 昭  
 和五八年
- (15) 浅野清「奈良時代建築の研究」第二編 奈良時代建築の復原的研究 第  
 二章 唐招提寺金堂 中央公論美術出版 昭和四四年  
 鈴木嘉吉「金堂」『奈良六大寺大観』第十二巻 唐招提寺一 岩波書店  
 昭和四四年
- (16) 「奈良時代僧坊の研究」奈良国立文化財研究所学報第四冊 奈良国立文  
 化財研究所 昭和三二年  
 「元興寺極楽坊本堂禅室及び東門修理工事報告書」奈良県教育委員会  
 昭和三二年  
 鈴木嘉吉「本堂、禅室」『大和古寺大観』第三巻 元興寺極楽坊元興寺  
 大安寺般若寺十輪院 岩波書店 昭和五一年
- (17) 「国宝東大寺本坊経庫修理工事報告書」奈良県教育委員会 昭和五八年  
 鈴木嘉吉「本坊経庫、法華堂経庫、勸進所経庫」『奈良六大寺大観』第  
 九巻 東大寺一 岩波書店 昭和四五年
- (18) 「手向山神社宝庫境内社住吉神社本殿修理工事報告書」昭和三二年 奈  
 良県教育委員会
- (19) 「重要文化財東大寺勸進所経庫修理工事報告書」奈良県教育委員会 昭  
 和五六年
- (20) 浅野清「唐招提寺経蔵の諸問題」『考古学雑誌』四八巻一号 昭和二七  
 年「奈良時代建築の研究」中央公論美術出版 昭和四四年  
 「唐招提寺宝蔵及び経蔵修理工事報告書」奈良県教育委員会 昭和三七年  
 鈴木嘉吉「宝蔵、経蔵」『奈良六大寺大観』第十二巻 唐招提寺一 岩  
 波書店 昭和四四年
- (21) 「重要文化財法隆寺網封蔵修理工事報告書」奈良県教育委員会 昭和四  
 一年  
 鈴木嘉吉「網封蔵」『奈良六大寺大観』第一巻 法隆寺一 岩波書店

昭和四七年

- (22) 浅野清「奈良時代建築の研究」第二編 奈良時代建築の復原的研究  
第八章 正倉院校倉の屋根内部構造の原形 中央公論美術出版 昭和  
四四年

- (23) 絵巻物に描かれた平安宮の門の桁隠が片方に四個描かれているところ  
を見ると、少なくとも柱上の組物が平三斗ではなく出組で、各々の桁  
の先に桁隠を付けているのでなからうか。

- (24) 福山敏男「神宮建築に関する史的調査」造神宮司庁 昭和一五年

「伊勢神宮の建築と歴史」日本資料刊行会 昭和五一年

- 同 「別宮正殿庭造日記とその解題」『神社建築の研究』福山敏男著作  
集第四 中央公論美術出版 昭和五九年

- 丸山 茂「伊勢神宮再考 主に外宮正殿と延暦儀式帳について」『普請  
研究』第二十二号 昭和六三年

- 同 「中世伊勢神宮社殿についてのいくつかの問題」『跡見学園短期大  
学紀要』第二六集 平成元年

- 同 「中世における伊勢神宮内宮正殿の構造について」『跡見学園短期  
大学紀要』第二八集 平成四年

- (25) 沢村仁「回廊」『奈良六大寺大観』第一巻 法隆寺一 岩波書店 昭和  
四七年

- 西条孝之「法隆寺西院回廊」『奈良県文化財全集』一三 法隆寺XI 奈  
良県教育委員会 昭和五一年

昭和五一年「国宝法隆寺西院廻廊他五棟修理工事報告書」奈良県教育  
委員会 昭和五八年

岡田英男「法隆寺回廊」『以可留我』4 法隆寺昭和資財帳編纂所 昭  
和六〇年

- (26) 細見啓三「山田寺廻廊」『建築史学』第一号 昭和五八年

「奈良国立文化財研究所年報一九八三」「山田寺東廻廊の調査」  
「奈良国立文化財研究所年報一九八四」「山田寺東廻廊の調査」

「奈良国立文化財研究所年報一九八五」「飛鳥地域の調査、山田寺東廻  
廊・寺域東北部(第六次)の調査」

- (27) 浅野清「奈良時代建築の研究」第二編 奈良時代建築の復原的研究

第一章 東大寺法華堂 中央公論美術出版 昭和四四年

鈴木嘉吉「三月堂棟木銘」『大和文化研究』五卷一〇号 昭和三五年  
伊藤延男「法華堂」『奈良六大寺大観』第九 東大寺一 岩波書店 昭  
和四五年

「国宝東大寺法華堂修理工事報告書」奈良県教育委員会 昭和四七年

上原真人「恭仁京文字瓦の年代」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所  
創立30周年記念論文集 同朋舎 昭和五八年

- (28) 「重要文化財法隆寺東室修理工事報告書」奈良県教育委員会 昭和三六年  
鈴木嘉吉「東室」『奈良六大寺大観』第一巻 法隆寺一 岩波書店 昭  
和四七年

東室の現在の北妻又首組は慶長修理の改修であるが、又首台は永和修

理の材で、又首棟の傾き大入納仕口があり、又首棟は二丁に切られていたが、もと又首棟の拜みに直接舟肘木がのつて斗はなかった。斗を用いないのは当寺西室に類例があるが、珍しい手法である。

- (29) 岡田英男「本堂」「大和古寺大観」第四卷 新薬師寺白毫寺円成寺 岩波書店 昭和五二年
- 岡田英男・宮本長二郎「新薬師寺綜合調査3本堂付地藏堂」【奈良国立文化財研究所年報一九七六】
- (30) 【国宝当麻寺本堂修理工事報告書】奈良県教育委員会 昭和三五年
- 岡田英男「古代における建造物移築再用の様相」【文化財論叢】奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 同朋社 昭和五八年
- 同「古代建造物の構造技法の復原に関する研究」私家版 昭和六一年
- (31) 【重要文化財東大寺法華堂経庫修理工事報告書】奈良県教育委員会 昭和三九年
- 浅野清「奈良時代建築の研究」第二編 奈良時代建築の復原的研究 第五章 唐招提寺経蔵 昭和四四年
- (32) 【唐招提寺宝蔵及経蔵修理工事報告書】奈良県教育委員会 昭和三七年 注(32)に同じ。
- (34) 浅野清「奈良時代建築の研究」第二編 奈良時代建築の復原的研究 第五章 唐招提寺経蔵 七 寄棟建物の復原 中央公論美術出版 昭和四四年
- (35) 国樹彰「大直祢子神社社殿修理工事の中間報告」【大美和】第七十四号 昭和六十三年
- 【重要文化財大神神社撰社大直祢子神社社殿修理工事報告書】奈良県教育委員会 平成元年
- (36) 福山敏男「奈良時代に於ける石山寺本堂の造営」【宝雲】五・七・十・十二冊 昭和八〇一〇年 【日本建築史の研究】桑名文星堂 昭和一八年、綜芸舎 昭和五五年
- 田中稔「唐招提寺所蔵「二字結縁法華経」【伝法灌頂作法】について」【奈良国立文化財研究所年報一九六三】
- 鈴木嘉吉「金堂」【大和古寺大観】第一卷 室生寺 岩波書店 昭和五一年
- (37) 【国宝室生寺金堂修理工事報告書】奈良県教育委員会 平成三年
- (38) 【法隆寺国宝保存工事報告書】第三冊 国宝建造物東院礼堂及東院鐘樓修理工事報告 第四章 調査事項 第六節 礼堂に関する史的調査 法隆寺国宝保存事業部 昭和一二年
- (39) 【重要文化財法隆寺妻室修理工事報告書】奈良県教育委員会 昭和三八年
- (40) 関野克「在信楽藤原豊成板殿復原考」【建築学会論文集】三 昭和一一年 同「在信楽藤原豊成板殿考」【宝雲】二十号 昭和十二年
- (41) 【平城京東堀河 右京九条三坊の発掘調査】奈良国立文化財研究所 昭和五八年
- (42) 二本松孝蔵「茅葺の研究」【東洋建築】一卷九号 昭和一二年
- その他茅葺民家の修理工事報告書の中に茅葺の仕様を詳しく記すもの



が少なくない。

(43) 石原憲治「堅穴住居に就て 特に登呂の復元を中心に論ず」『建築雑誌』  
第七七五号 昭和二六年

村田治郎「原始住居構造の一つの型」同右

太田博太郎「古代住居の系統について」同右

同 「原始住居の復元について」『考古学雑誌』四五卷一号 昭和三四  
年

同 「日本住宅史」『日本住宅史の研究』日本建築史論集Ⅱ 岩波書店  
昭和五九年

(44) 城戸久「尾張に於ける古農民建築」『建築雑誌』六六四号 昭和一三年

(45) 合掌構造、妻又首組の構造は原始住居の合掌構造から発展し得るもの  
と考えたが、寺院建築における切妻造妻飾の又首組、内部合掌構造は  
寺院建築技法とともに朝鮮半島を通じて伝来し、宮殿建築などにも広  
く用いられたのであろう。